

新名寄市総合計画（第1次）後期計画

## 第5回保健医療福祉部会議案

日 時 平成23年9月28日（水）

午後6時30分～

場 所 名寄市総合福祉センター

1. 開 会

2. あいさつ

3. 報 告

(1) 市長との懇談会について …… 資料1

(2) 財政見通しについて …… 資料2（当日配布）

4. 議 題

(1) 総合計画後期計画（素案）について  
（主な計画事業）

(2) その他

5. その他

6. 閉 会

## ■第5回保健医療福祉部会 顛末及び発言内容

(司会) 山崎 社会福祉課長

(挨拶) 西部会長

前回の部会でいただいた計画素案に対する意見や提言などを、主管する各課で含めていただいて今回の資料となっている。限られた時間であるが、ご議論いただきたい。

### — 以降、西部会長の司会進行 —

#### (1) 報告事項

- ・事務局から「市長との意見懇談会」について報告
- ・財政課長から「平成24年度以降の財政運営について」説明

#### (2) 新名寄市総合計画後期計画(素案)について(シート順に担当から前期との変更点について説明)

- Ⅱ-1 健康の保持増進・・・ P1 【説明：佐藤保健センター所長】
- Ⅱ-2 地域医療の充実・・・ P3 【説明：岡村市立総合病院総務課長】
- Ⅱ-3 子育て支援の推進・・・ P6 【説明：吉原こども未来課長】
- Ⅱ-4 地域福祉の推進・・・ P8 【説明：山崎社会福祉課長】
- Ⅱ-5 高齢者福祉の充実・・・ P10 【説明：遊佐高齢介護課長、江尻地域包括支援センター所長】
- Ⅱ-6 障がい者福祉の推進・・・ P13 【説明：山崎社会福祉課長】
- Ⅱ-7 国民健康保険・・・ P16 【担当：紀国谷国保高齢医療係長】

#### (委員)

7つの施策についてご説明がありました。文言の整理が主ですが、第3・4回の部会でかなり時間を掛けていろんな議論いただいたので、ある程度意見も出尽くしていると思うが、新たにあればご発言願いたい。

#### (委員)

子育て支援の推進に関して、病児保育はせっかく作ったのに利用件数が少ないとの報告があったが、件数が少ないのは利用しにくさだと思う。子どもが熱を出して預けたいが、仕事に行く朝の忙しい時に医師の診断書を事前に提出しないとならないなど手続きに手間がかかるため件数が少ないのでは。

たぶん、休日保育へのニーズは昨年から少しずつ増え、入園の相談時も休日働かなくてはならないという話も多く受けている。それらを含めて計画していただければ、ぜひ、“利用し易い”という文言を追加して、本当に必要な人がどうやって有効に利用できるのかということを考えながら作っていただきたい。

#### (吉原こども未来課長)

休日保育の必要性は感じている。次世代育成支援後期行動計画のアンケートの中で、優先順位は一時保育、病後児保育、休日保育と数字が表れていた。保育所では、病児保育については中々実施できないということで、病後児保育ではどうかと認定保育園の開設時に実施のお願いをしていた。

アンケートの取り方が非常に大事と痛感している。休日保育を実施するには、きちんとしたアンケートの取り方をしないと本当の声は聞こえてこないということで、今回は“ニーズの把握”という文言を入れさせていただいた。

(委員)

障がいがあるのではということの疑いを母親に話すのが難しい。受け止める親も大変。赤ちゃんからの成長を記録する「すくらむ」というのが名寄市にあるが、それを母親が入園するときに持ってきていただければ、話しづらいことも「すくらむ」を見れば保育士の担当もわかる。家庭や保育所で記入された情報が、小学校に上がった時、学童保育でも接し方がわかるので、有効に活用するのはどうか。

ただ、「すくらむ」を出すタイミングがすごく難しい。赤ちゃんが誕生すると同時に子育て日記をつけてはと配布するなど、できれば母子保健事業のところに入れていただいて、保育園、小学校に行く時にも見せられる状況を作っていただけたらともっとスムーズに情報がいくのかと思う。

(委員)

情報を一貫してサポートが継続できるかという話。こども未来課が所管しているだけでなく、教育委員会の特別支援教育に関しての動きにも連動してきていると思う。「すくらむ」というのは基礎情報として重要だが、基本的には就学時健診、保健所での健診事業の情報が一貫しているのかと問われている。

相互理念的な事業運営だとかが方策の一つ。具体的に教育委員会では専門化チーム、コーディネーター連絡会などのネットワークが非常に充実してきている。ただ、その中でもしっかり周知を徹底しないと、小学校では使えるが、幼稚園は使えないのか。所管が違うから保育所では利用できないのかとなる。

ところが、ネットワークなどの資源は子供たちのためにあるもの。今の時点でも活用できる状況にはなっていて、非常に良質的に高い展開がなされている。資源とサービスは既にあると思うので、活用を図っていけば十分に対応できていくものと思われる。

(佐藤保健センター所長)

母子保健の中で、生まれた時期から一貫した発達経過を見るということで、「すくらむ」をどのように有効活用できるのかと使い方をこれまでも検討してきた。

一つとして、産まれたときに渡しても母親がどこまで使いこなせるかという大きな課題がある。

コンパクトにしたものでも発達がしっかり見えるもの。それが有効に活用され、障がいを意識させるものではなく、正常な発達がきちんと捕らえてもらえるものとして、6歳までの成長記録も含めて「発達記録表」というのを2年前程から母子手帳と一緒に配布している。さらに、健診の中でも、母親が記録できるように活用できるよう工夫している。

(委員)

その活用状況は。

(佐藤保健センター所長)

3歳児健診まではある程度記入の確認をしているが、全員が細かく記録を書いている訳ではない。

ただ、多くの母親達は母子手帳にも記入されていて、支援が今後必要になってくるような場合には、母親にも明らかにしていく。できるだけ幼稚園や保育所には、必要な情報を伝えられるような形で進めているところ。

(委員)

「すくらむ」というのは、発達障害者支援法の中で作成義務がついたもの。その本質的な目的とは何かということでお話すると、記録を残すことではなく、それによって“人がつながる”こと。今まで行われた支援がつながっていくということ。課題はずっと一貫して見つめる人、資源が地域の中にあるのかということ。教育委員会の中に専門家チームがあるが、もしそれが翼を広げられない状況にあると、そこが繋がらない部分となる。

ただ、今は幼稚園に拡大しているし、保育所も子育て支援センターも支援対象。資源がつながっているから、チームの人達は保育所や子育て支援にもどこにでも出入りができるようになっていく。資源と

してのつながりが持てない限りは、記録をどれだけ詳細に書いても活用されなければダメ。重要なのは、環境が整ってきている事実があること。名寄の場合にはその環境が全国的に見ても非常に高い水準で整ってきている。それをどうするのか。

(委員)

母子手帳が配られる一人ひとりに「すくらむ」が配布されるので、健診の時に項目を見ながら相談できるということか。

(佐藤保健センター所長)

健診の中でも発達については、「すくらむ」と必ず連動する情報となり、必要な時に支援につながるようにしている。

(委員)

その存在を私たちが知っていれば良かった。入園の相談、就学時健診の時に、困っていることがあれば、母子手帳のほかに発達記録を見せていただけるのかと聞けば良いということ。

(委員)

もう一つには、それぞれの機関がオープンになること。発達障害者支援法のモデルとして示されたものだが、専門家チーム、巡回チーム、コーディネーター連絡会という機関にもオープンにし、客観的に包括的に見たときに、サポート・継続の必要な子供たちに対し、いろんな人たちが協働した中で支援計画が作られていくことが重要と思う。その準備はできているということ。

(吉原こども未来課長)

「すくらむ」会議の中に入れていただいているが、一生懸命記入したものが本当に学校で活用されているのかという疑問は保育所の中であった。障がいのある子供だけでなく、情報をどういった形で活用できるのか。そのことに対して今、一生懸命汗をかいていただいているのが瀬戸口先生である。

(委員)

別冊の「すくらむ」というのは。

(佐藤保健センター所長)

別冊の「すくらむ」はあるが、内容は障がいを意識して記入する欄が多くある。それを、産まれたときに渡したにしても、あまり書きようがないので、健康に発達してほしいという思いを記録できるように「発達記録表」とした。

特別支援教育の中で「すくらむ」のモデル事業を行ったときに、他市町村を参考にしながら名寄バージョンにし、母子手帳にも折り込んで、あまり使いづらくなならないような意識をして作成した。それが有効に活用できているのか再度確認しながら、支援につながるよう母親にも働きかけたい。

(委員)

全員が記入する必要はない。問題を探すためにやっている訳でもない。健全に育っていけばよいと願っているが、中には現実に苦戦している方がいる。

気づきの機会というのを様々な組織で行っているが、その情報は共有されるというのが大事で、早い段階から周りのサポートがあれば、子どもも親も楽になれるというのを目指すのがこの事業。

病院との連携も重要。病院で診断されているがサポートがない、学校には伝わっていないというケースもある。教育委員会の枠組みの中なのだが、少しずつ必要性に基づいてネットワークが広がって来る。

(委員)

母子手帳などは個人的なものという意識があるので、人に見せるには抵抗感があるのでは。一般の機関に自分の子どもの情報が共有されていくということが、母親にとって難しい面があるのではと思う。

成長記録に保育園での様子、幼稚園での生活欄があれば、もっと皆で育てているという意識というの

が母親にも実感できるのでは。サポート体制があるのだが、利用しやすくするためにどうしたら良いか考えていただきたい。

(三谷健康福祉部長)

療育センターも密着させていただいているが、保護者に対して情報の共有について説明させていただいて、併せて小・中学校までの関わりを持っている。

個人情報の部分で、プライバシーというのは全ての子どもに対してという訳ではなく必要に応じてと思う。災害時など生死に関わっている時にプライバシーが問題になるということにはならないと思う。個人的にマイナスになるのが個人情報。しかし、誰が見てもあなたのためにやっているということはプライバシーということではないと思う。

誤解もあるかもしれないが、情報を共有しながら、ひとりの子供を皆で育てていくための連携は必要だと感じている。

(山崎社会福祉課長)

今回欠席の藤田副部長より、皆さんからの御意見を伺いたいと預かってきた。

何点かあるので、議論願いたい。

まず、1ページ目の「健康の保持増進」〔現状と課題〕の中に「特定健康診査の現況」いうことで表があるが、前期（平成17年度）と後期（平成22年度）では内容が違うのでは。違うのであれば、ここに掲載している表の意味は。

(佐藤保健センター所長)

平成20年度から制度が大きく変わり、対象者も変わった。

比較することでわかりづらくなるということは理解できるので、前期計画の部分は触れなくて、後期の現況だけ数値を上げて、次回との比較ができる表に変えていきたいと考えている。

(委員)

ここでは、市民の皆さん全員がどれだけ健診を受けているか数字を示すところ。

(三谷健康福祉部長)

同じ条件でないものは比較にならない。単年度表記にするなどとさせていただきたい。

(山崎社会福祉課長)

10ページ目の「高齢者福祉の充実」〔現況と課題〕の中で、前期計画から75歳以上の後期高齢者の割合を記載しているが、高齢者とは65歳以上が対象となることから、75歳ではなく65歳以上に変えた方が良いのでは。

(委員)

包含関係で75歳以上に関して書くとすると、高齢化が進む中、高齢者のうちとくに75歳以上の後期高齢者に関してはとなる。

(山崎社会福祉課長)

同じく10ページ目の「高齢者福祉の充実」〔施策の基本的な考え方〕の最後の◆の文書に関して、環境整備をするのは、前期では在宅介護を重点となっているが、後期では居宅で日常生活を営むことに配慮しつつとなっている。地域それとも施設での環境整備なのか。前期と方向性が違うのでは。

また、11ページ目の「高齢者福祉の充実」〔施策の体系〕で「高齢者住宅の整備支援」とあるが、

シルバーハウジングを指しているのか、全部の施設を指しているのであれば、表現を各種高齢者住宅の整備支援とした方が良いか。

(三谷健康福祉部長)

文言整理を事務局でさせていただきたい。

(山崎社会福祉課長)

13ページ目の「障害者福祉の推進」〔現況と課題〕中で記載しているノーマライゼーションだが、一歩進んでソーシャリゼーションという言葉があるが。

(瀬戸口委員)

考え方、10年置きに概念も変わってくる。そもそもの概念が違うので、現時点でポピュラーなのは、ノーマライゼーションでよろしいかと思う。

(委員)

子どもの支援の情報共有の話があったが、障がい者や高齢者の情報共有も今後計画していただきたい。例えば、施設から在宅、在宅から施設になったときに効率的に情報が共有できると良い。難しい話かもしれないが、全年代の支援を皆で情報共有できたら良いと思う。

(委員)

障がい者も就労支援まで。就労の安定から先というのが中々無い状態。高齢者もサポートの空白が生まれてしまっている。

(委員)

基本的には日本の場合、介護保険制度からスタートして、マネジメントから支援の計画という流れ。どこが充実すれば良いというのは、その担当のマネジメント機能の強化しなければならない。では、障がいの場合において、どこが軸を担うかというところと行政窓口になると思う。施設利用者以外のつながっていないケースは、マネジメント機能のひとつの大きな役割として障がい福祉課の考え方と周りとの連携の部分。しっかりとマネジメントができれば、自ずと連携も図ることができるのでは。

(委員)

部局の横断、縦断的なセンターがあるかどうか。それを担う人材も含めて大きい鍵になる。

最後ということなので、具体的に文書が変わって担当の皆様のご努力が見えた会議となった。ありがとうございました。

具体的に年代別というのは、そもそものアンケートの結果から根ざした議論としてきている。

いろんな所で共通してくることはある。実際に具現化されている場所、機能をどう作るか。一つの部署で予算化、事業化しているだけでは上手くいかないだろう。先導的な地域が見えているので、そういった情報に関しては提供できる限りお示ししたい。

大学については、いろんな所に活用が盛り込まれているが、資源の活用を一緒に考えていきたいと思っている。

(三谷健康福祉部長)

全5回の会議について、熱心にご議論いただき、誠にありがとうございました。

今後、国の施策自体が変化してきているので、中々小さな自治体単独で行うのは少ない部分が多々あります。今回いただきました皆さんの意見を反映させて、今後5年間の行政サービスとさせていきたいと思っております。今後ともどうぞご協力をお願い致します。ありがとうございました。